秘画殺人事件

石沢英太郎

集英社

秘画殺人事件

一九七九年 三 月一〇日 初版印刷
一九七九年 三 月二五日 初版発行

定 価 七八〇円

著 者 石沢英太郎

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一
電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六一
販売部 (〇三) 二三八―二七八一

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1979 E. ISHIZAWA Printed in Japan

0093-772186-3041

目

次

プロローグ　7
事件　10
失踪　16
ゴッホと浮世絵　26
秘画への誘い　44
捜査　57
ある情報　73
捜査　93
展示会開催へ　108
捜査　138

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暗い目標 153
捜査 176
パリにて 187
事件 217
浮世絵展開かる 231
逆転 238
エピローグ 246

装丁　浅利佳典

秘画殺人事件

プロローグ

ある日曜日。

柿内守夫は、こまかい字がギッシリつまった日仏辞典から眼を離し、窓の外を眺めた。

眼の疲れをいやすためだった。

池の端を散策している人々がみえ、池の水面もキラキラと陽をはじき返して、のんびりとした風景である。

柿内がなんどか訪れた南仏のアルルの風景に似ている。

池は大濠公園の大部分を占めている。大濠公園といえば、福岡屈指の景色の美しい所だ。

柿内が勤めている陽光保険福岡支店のこの寮は、大濠公園を一望のもとに見渡せる絶好の場所に建っている。昔、福岡でも有数な資産家の住宅を買いとり、瀟洒な寮に建てかえたときいた。そういえば、ここら一帯、一流会社の重役宅や寮が多い。高度経済成長の波に乗った会社が、金に糸目をつけずに、この辺の家や土地を買いこんだからだ。

柿内は、また眼をフランス語の原書に置いた。しかしもう飜訳する根気は失われていた。

大体少し無理だったのだ。

独習の実力では、この本の飜訳は背伸びし過ぎた感じがある。ものはヴァン・ゴッホが、弟のテオに宛てた手紙の原書だった。

ゴロリと寝て、眼を壁に当てた。ゴッホの「アルルのはね橋」の画が掛かっている。もちろん複製ものである。この画は、ゴッホが日本の浮世絵の構図をとり入れたとされている有名な画だ。柿内は熱烈なゴッホファンなのである。

手を伸ばして、週刊誌をとった。

フランス語辞典のこまかい字に悩まされた眼には、週刊誌の文字が大きく見えた。

なんとなくめくったとき「春画」の複製という活字が眼にとまった。

柿内は読む気になった。浮世絵そのものには、それほど関心はないが、ゴッホが傾倒したという点で、間接的

に興味がわいた。

短いコラム欄のエッセイで、筆者は杉浦明平。この人の作品を一、二柿内は読んだことがある。気骨のある作家との記憶がある。

柿内は軽く読み進めた。わかりやすい文章だった。

『浮世絵は、歌舞伎とともに江戸庶民の芸術の華であるといってもいいすぎではなかろう。

しかし近代化に熱中していた日本では、浮世絵は卑俗で下品な玩具並みにしか見られず、春画だけが珍蔵されていた。もちろんそれは芸術としてでなく、嫁入り用の性教科書でなければ、猟奇好色の材料としてであった。

明治大正の国文学者の中には、せっせと春画や笑い本を蒐集した人が少なくなかったが、はたしてかれらの目がそこに美を認めていたかどうかは怪しい。

浮世絵が日本の骨董屋にさわがれだしたのは、やっと大正時代ではなかったかと思う。贋作問題が出て、学者が恥をかいたりしたのは、浮世絵ブームの煽りだったようである。といっても、ごく一部の絵師の作品で浮世絵なら何でも数万円で売れるというわけではなかった。

ともかく、日本が開国していらいの五、六十年間に浮世絵はどんどん海外に流出してしまった。

ところで最近は浮世絵は熱狂的なブームを迎えて、三流四流の作品も貴重品扱いをうけることになった。もし浮世絵をすばらしいと思っても、普通人の手の出しようがなくなった。

しかし本ものでなくても、複製でも、精巧にできていたら、鑑賞に差しつかえはなかろう。「浮世絵」という専門雑誌のほか、あちこちの出版社で高価な画集が出ているから、それで辛抱すればよい。

ただ、こまるのは、春画の複製が出版できないことである。江戸時代には笑い本も草双紙屋の店先に公然と並べられていたし、北欧やアメリカではすべてのポルノグラフィーが解禁になっている。日本でも秘密出版がおこなわれているという噂はきいたことがある。が、ばれればおかみが「御用御用」と縛りにくる。

だから、笑い絵を本や雑誌にのせるときは、そこだけ黒く塗ったりまっ白にしておいたりで、どうも見ばえがしない。

浮世絵には、風景画もあれば役者の似顔絵もある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、少なくともそれと同じ重さで春画が作られていた。そのうちに傑作がいくつかあるが、それをカットなしで、成人が入手できるようにすべきではなかろうか。

今すぐ普及というわけにゆかぬとしても、これを後代に伝えるのは、わたしたちの義務である。というのは、肉筆の綿絵などは不時の災害で焼けたら、それでおしまいだし、版画の方も、公式に複製がみとめられていないから、減ってゆくばかりで、このままだったら、春信や歌麿の美しい作品の中には永遠に消えてしまうのがあるかもしれない。今のうちに、限定版でも複製をつくっておかねばならぬ。

それに傑作ともなれば、一枚数十万円から百数十万円といわれている。眼福は金持ちだけでなく、一般人にも与えられるべきだ』

平易な文章であり、押しつけがましい主張でもなかった。気持ちよく読めた。

しかし、このエッセイに柿内が共感したわけではない。第一、柿内は浮世絵の春画なるものをいままで見たことがなかったからだ。

それよりも、柿内はこのエッセイを読んで、チャタレイ裁判やいま公判中の、日活ポルノや「愛のコリーダ」を思い浮かべた。

しかし春画にしろ、そういった刑法一七五条（わいせつ文書頒布等）をめぐって起きている法廷事件も、柿内自身に直接かかわってくる切実な問題でもなかった。

読み終わり、数分後には柿内はこのエッセイを忘れた。

その時点では、あとでこの春画にまつわる事件に、当の柿内がまきこまれるなど、夢にも考えていなかったのである。

事件

一月十一日、毎週水曜日に出るパリ発、東京着日航機46×便は、予定どおり羽田上空にさしかかっていた。

約十五、六時間の長旅を終わりいよいよ日本だ。正月休暇を利用しての団体客の多い機内には、ホッとしたフンイキが、乗客の中にかもし出されていた。アナウンスがあり、禁煙とベルト着用の指示ランプがついた。

そのとき、

「あーっ、スチュワーデスさん！」

けたたましい女のかな切り声に、ベルトをつけたまま乗客は、驚いてその声のほうに視線を向けた。エコノミー・クラスの窓側から二番目の席の、主婦らしい女性が、ベルトを解きながら、立ちあがろうともがいていた。スチュワーデスが駆けよった。その女性は、ふるえる指で窓ぎわの一人の男の乗客を指さした。

「あっ」

とスチュワーデスも息をのんだ。

六十年配の男が苦悶にひきゆがんだ表情で、のどをかきむしるようにして、身体を曲げている。

「お客さま……」

とスチュワーデスが、その男の背に手をかけた。男はくずれ落ちるように上半身が、グラリとなった。

「あっ」

と二度目の抑えた声をスチュワーデスはあげた。恐ろしくひきゆがんだその顔は「急死」を表わしていた。しかし、さすがに訓練されたスチュワーデスだった。

「みなさま。お立ちにならないで下さい。お客様が急病になられたご様子です」

「パーサーを呼んで」

と同僚にいったとき、誰かが知らせたのか、事務長が緊張した顔で急いでくるところだった。

事務長は男の様子をジーッとみた。そして、

「どなたかお医者さんはいらっしゃいませんか」

と機内の乗客に呼びかけた。よくとおる声だった。シーンとなった座席から、五十年配の男が、手をあげて立ち上がった。

「お医者さんですか」
「はあ、内科です」
その男は答えた。
「おそれいりますが、診断を……」
と事務長がいった。
「はい」
医師は念入りに男の瞳孔を調べ、脈をみた。
「死亡していますな」
と低いがハッキリした声がいった。事務長の顔色がかわった。とにもかくにも機上での変死である。
医師は事務長の耳に口をよせ、
「どうも青酸化合物による変死のようですね」と囁いた。
〝ようですね〟は慎重を期した医師の言葉だったかもしれない。鮮紅色の死斑がいち早く男の顔に出ていた。これは青酸中毒の特徴だ。
「おや、これは……」
と医師は、とり落とされてひらかれている本を手にとった。男女交合をあらわに描いた秘画画集であった。
「パリ便変死事件」は、警視庁から、松崎刑事調査官が空港に着いてから、テキパキと事務的に進行し始めていた。刑事調査官とは、聞きなれない職名だが、五、六年前に設置された犯罪捜査のエキスパートである。各都道府県の警察本部に一名配置されており、身分は警視正である。松崎刑事調査官は警視庁配置の数名の刑事調査官のなかで、とくに国際的事件を担当していた。英・仏・独語を自在に使いわけ、国際刑事警察機構本部にも出向した実績もあるし、『国際比較犯罪学』の著書をもつ。四十五歳、東大出のエリートでもあった。
黙って所轄警察署捜査一課長の現在までの報告を聞きおわると――
「で、乗客は？」
と松崎刑事調査官はいった。
「到着後、機内にそのまま待ってもらっております」
と一課長が答えた。
松崎刑事調査官は、腕時計を見た。午後九時であった。
「マズイな」
と松崎がいった。
「え？」と一課長。

「さっきクルマからおりたとき、『ハイジャックですか』と問いかけた、そそっかしい新聞記者がいた。誤った噂として流れる懸念がある」
といい、松崎は乗客名簿のコピーをとりあげ、
「かりにこの事件が他殺事件としても、二百七十二名の乗客をこのまま機上に釘づけには出来まい。鑑識も終わっているし、変死者の周囲の座席の乗客、スチュワーデス、事務長の一応の事情聴取は済んでいるし、住居もあきらかになっているのだ」
といい、しばらく考え、
「乗客は降ろして家に帰ってもらおう」
と松崎刑事調査官はキッパリといった。ホッとした捜査員もいた。彼等は、出迎え客との間に立って、事情をうち明けられないため、出迎え客から突きあげられている日航係員の苦しい立場を、眼の前に見ていたからだ。
「では、新聞記者や出迎え客に、変死者があったと発表してもよろしいのですね」
一課長が念をおしていった。
「うむ、君から発表してくれ」
「他殺か自殺かは？」
と一課長がきいた。一番肝心の件である。他殺・自殺を決めるのは、おおむね刑事調査官の職能の中に入っている。
「うむ」
と松崎はいい、しばらく考えた。
松崎自身まだ決めかねていたのである。他殺となれば、例をみない航空機上殺人事件として、捜査本部を設けることになるだろう。松崎刑事調査官は、もう一度、旅券と出入国記録をみた。
変死者――旅券を見れば、氏名・北山郁哉とある。乗客中の医師および駆けつけた鑑識医の鑑定によれば、青酸中毒となっている。いずれにしろ、異状死には、間違いない。しかし、他殺となれば、捜査本部設置の方向をたどる。自殺となれば松崎刑事調査官には、まだいろいろの疑問があった。刑事調査官には、果断と同じ程度に慎重という裁決が要求される。
「他殺か自殺かは司法解剖の結果で決める」
「では変死者がこの本を持っていたということを発表しても……」
一課長の言葉に、捜査員たちの眼が、好奇をまじえ

て、いっせいに秘画画集にそそがれていた。
空港派出所のスチール製の机の上に、その秘画画集は置かれてあった。
B5判より少し大きな型。
46×便の乗客の一部の者も、捜査員のほとんども、好奇の眼をもって眺めたと思われる。パリで発行された日本の浮世絵の秘画を集めた画集であった。秘画といえば、春画、枕絵、危な絵……などの別称はあるが、ズバリいえば、男女交合の図を、性器をあらわに描いたものである。もちろん日本で発行すれば、刑法第一七五条「わいせつの文書、図画その他の物を頒布もしくは販売し、または公然これを陳列したる者」の条項に適用され二年以下の懲役または、五千円以下の罰金もしくは科料に処せられる。パリだからこそ発行されるのだろう。
松崎はその題名を見た。
FLEURS DU JAPON『日本の花々』というほどの意味であろう。奥付をみると、スイスで印刷され、パリで発行されている。松崎にとってはさ程珍しいものではなかった。パリ留学中ラテン区の古本屋を歩いて、松崎自身手にとったこともある。買って帰るには警察官という職務が災いした。
カラーでなく白黒である。一九六九年刊を割引いてみても、日本に比べ、印刷技術は幼稚であった。世界最高の水準ともいわれる、日本のカラー写真技術を駆使すれば、妖艶そのものの再生がもっと素晴しく出来るだろうと思われる。しかし、このパリ刊の秘画画集は、かならずしも、わいせつ感をそそる本と一脈違う。
ちゃんと、「日本の秘画の歴史」を巻頭に小論文で載せているし、ざっと見たところでも、鳥居清信、勝川春章、鳥居清長、喜多川歌麿、葛飾北斎と並べて、秘画の系譜を忠実に追っている。松崎は浮世絵にくわしいとはいえないまでも、この画集がマジメな出版であることはよくわかった。そして、ただ松崎がザッとめくって見ただけでも、かねて評判をきいていた喜多川歌麿の「紅毛人男女の図」があった。たいへん巨大な紅毛人の男の性器が、これを受けようとする同じく紅毛人の女の花弁の前に猛りたっている。
歌麿は想像でこれを描いたのだろうか、それとも……。
松崎刑事調査官は、ここで白昼の猥雑な幻想を断ち切

った。
「パリのサン・ミッシェル大通りの古本屋でよく売っている本さ」
と捜査員の好奇の眼を、断ち切るようにいった。
「では、乗客を降ろしましょう。記者団への発表は私がやらしてもらいます」
と一課長はいい、
「一応署に戻れ」
と捜査員に命令した。
松崎刑事調査官には、ざっと見たにしろ、やはり秘画の甘美な後味は残っていた。初期の清信の素朴な味わい。浮世絵は秘画でも理想の男女を描く。享保時代清信描くところの男は、むっちりと肌白く、女もグラマータイプが多い。これが七〇年下って、寛政の歌麿の秘画となると、女は滅法に艶っぽく、男はキリッとした男前となる。アクメの際の足指の反りの描写もこまかい。松崎刑事調査官は頭をふって、現実に戻った。それにしてもこの変死事件には謎が多過ぎた。
松崎刑事調査官が、空港から出て、クルマを待たしてある駐車場に急ぐと、まき込まれた変死事件から解放された乗客と出迎え人とで、ごった返していた。
それでも無事だったという喜びが双方にあふれている感じだった。どうもハイジャック頻発の折から、ちょっとした遅延事故にも、みんなは過敏になっている。早く乗客を解放して、良かったと松崎は思った。しかし、それはまた、ひとつの責任として松崎刑事調査官の肩に掛かってくる事柄でもあった。
もし他殺としたら？
これはたいへんな複雑な問題となる。そして、この要素もじゅうぶんあり得ることであった。
松崎はクルマの上で、事件を反芻してみた。
変死者の北山郁哉は航空機到着のおよそ十分前に死亡している。彼の足元には、秘画画集と共に、薬の容器が落ちていた。鑑識医によれば、エフェドリンのカプセルの入った容器だという。エフェドリンといえば、ポピュラーなぜん息の薬である。彼がその薬の容器から出して飲んだ直後に苦しみ出した、ということは隣席の婦人が証言している。そうなると、そのカプセルには青酸化合物が入っていたとせねばなるまい。何人かが、パリ出発前に彼の常薬とみなされるエフェドリンの容器に、青酸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com